

---

# 撃ち抜け！ トリハピ魔法少女ほとりちゃん！

八滝 鈴鹿

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

撃ち抜け！ トリハピ魔法少女ほとりちゃん！

### 【Nコード】

N9021D

### 【作者名】

八滝 鈴鹿

### 【あらすじ】

世界の天敵を倒す為、魔法少女は夜闇を駆ける。魔法庁特殊災害処理二課、通称特処二課の水無瀬川ほとり（13）は実力はエリートだが、大雑把な性格の為に不祥事の多い魔法少女（公務員）。そんな彼女に上層部から送られてきた監査係。あまりのことに怒りだす彼女は十件の仕事を穩便に終わらせるといふ難業（本人にとつては）に挑むが……。

撃ち抜け！ トリハピ魔法少女ほとりちゃん！

撃ち抜け！ トリハピ魔法少女ひとりちゃん！

人気のない深夜の街。月明かりは雲に隠れ、漆黒の闇が辺りを包む。

本来ならば夜半であろうと明かりがあるはずの都会の街。しかし何故かその場に光は一片も存在しなかった。

異常で異様な夜闇の中、オフィスビルの森を駆け抜ける影が二つ。

一つは二メートルを越す巨大な異形。

そのカタチは人に嫌悪と恐怖を与える。喩えられるモノがない程、それは異形としか言いようがない異形。

上半身は人間。しかしその頭には髪も目も鼻も耳もなく、唇のない巨大な口が付いているだけ。腕は途中から人でなくなり、粘液がぬらつく薄気味悪い触手が蠢く。

下半身は異様。筋肉がそのまま露出している八本の足が、その見た目とは裏腹に高速で動き、その巨体を闇夜に舞わせる。

色は俗悪。姿は醜悪。知能は劣悪。思想は凶悪。そして嗜好は最低最悪。

全てを害し、人を喰らう、この世界全ての天敵とも言えるその異形は、“エッグ”と呼ばれていた。

「GUU...GAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA!!!」

八足歩行でビルとビルの間を飛び越える“エッグ”。

本来ならば“闘争”の為に使われるその超常の力は、この場において皮肉なことに“逃走”の為に使われている。

全てのモノの天敵は今　その唯一の天敵に追われていた。

「まーちーなーさーいー！」

年端も行かぬ少女の声。“エッグ”を追うのは一人の少女。

「ええいつ、埒が明かない！」

身に纏うはフリルがふんだんに付いた黒いドレス。風に柵引くツインテールの黒髪。手に握るは金属製の長杖。

「ベルゼルアルド！ サイド・フォーミュラ 第三魔法式、オープン 展開！」

ガキン、という音。それは少女の持つ杖から。

次の瞬間、少女の周囲を回り出す、金色の光の帯。

「集え、破魔の雷。直天より降りて裁きを下せ　！」

響くは歌声。舞うは電光。渦巻く力は天の裁き、断罪の牙。

「ヴァーチカル・ストライク 『断絶の雷神斧』！」

「G . . . G A A A A A A A A A A A A A A A A . . . . . ! !  
？」

神々しき光の刃が駆け抜け、醜悪なる“エッグ”は一瞬にして灰に還る。

少女はクルリと杖を一回転させ、天使のような笑顔を浮かべた。

「ふっ、だーい勝利！」

撃ち抜け！ トリハピ魔法少女ひとりちゃん！

撃ち抜け！ トリハピ魔法少女ほとりちゃん！

少女こそ世界の天敵の天敵、“魔法使い”の一人。

「この魔法少女ほとりちゃんにかかれば、“エッグ”の一体や二体、楽勝よ」

水無瀬川<sup>みなせがわ</sup> ほとり。人呼んで“トリハピ魔法少女”ほとりちゃん、である。

「水無瀬川。お前は一体何度言われたら理解するんだ？」

「うう……」

そんな魔法少女は翌日、灰色のデスクが六つほど並ぶオフィスで説教されていた。

「市街地で雷属性の放出系、それも上級魔法……さあ、どうなるか言ってみなさい」

「えと、周りの電線やら何やらをショートさせて、最悪の場合、発電所を破壊します……」

理由は昨夜の魔法行使について。説教しているのはほとりの直接

の上司、綾倉<sup>あやくら</sup> 幹生<sup>みきお</sup>だ。

「うん、よくわかったな。合格だ」

「やったー。あはははは」

「ははははははは　　って笑っとる場合かあっ！」

「うひゃん！」

怒鳴られて縮こまるほとり。

幸い今回は大きな被害にならなかったとはいえ、下手をすれば大惨事になりかねなかったのだ。怒鳴られるのは当然である。

魔法庁特殊災害処理二課。通称、特処二課。  
決して表沙汰にはならないが、ほとりは歴とした日本国の公務員だ。

“魔法使い”は数が少ない……だからこそ、十三歳という明らかに就労が不可能な年齢であっても公務員をやっている、特例中の特例である。

「うー、これでもあたし頑張ったんですよ？　でもアイツ、あっち行ったりこっち行ったりでやりにくいつたら、もう」

「それを何とかするのがお前の仕事だ」

「横暴ですよ！　ブーブー！」

「豚になる前にデスクワークを終わらせなさい」

撃ち抜け！　トリハピ魔法少女ほとりちゃん！

撃ち抜け！ トリハピ魔法少女ほとりちゃん！

「グーグー」

「今度は狸か……」

狸寝入りを始めるほと리를無視して、幹生はデスクワークを開始する。

ほとりの直属の上司ということは、彼女の起こした不始末を上  
報告する義務がある。

言い換えれば、報告して説教される義務がある。

「やれやれ……」

綾倉 幹生、二十二歳。今日も苦勞が絶えない一日のようだ。

「 という訳で、水無瀬川には今度からお目付け役が付きます」

「 はい？」

ほとりが睡眠から目覚めると、何やら沈んだ顔をした幹生が出迎  
えてくれた。

ほとりが寝たふりをして実際に寝てから六時間、その間に上の人  
に怒られたのだろう。

「 てか、どついう訳ですか？」

撃ち抜け！ トリハピ魔法少女ほとりちゃん！

いきなり』 という訳で』と始められたのでは、何がなんだか分からない。ほとりの疑問は当然のことだろう。

「お前があまりにも人の話を聞かないので、監視が付きます。オーケー？」

「ええっ？ あたしがとんでもなく不真面目な人みたいじゃないですか、それ」

「真面目だと、本気で思ってるのか？」

「え、えっと……ちょーっただけ不真面目さんだった、かな？」

怖い顔で凄まれたので、言葉尻を濁すほとり。

幹生は見た目は優男だが、昔は色々暴れまわっていたらしく、その迫力は一般市民なら気絶させることが可能だろう。

「はははは……だいぶ不真面目さんの間違いだろうっ？」

「うう……ごめんなさい」

素直に謝っておく。ここで逆らった所で良いことはない。それは二年間の付き合いでよく分かっていた。

「で、お目付け役って誰ですか？」

ほとりはこのまま続けても怒られるだけと判断し、早々に本題に入ることにした。

幹生としても不毛な言い合いに益はないと分かっているので、話

を元に戻す。

「まあ、要するに魔法庁から使い魔を付けるので、仕事の時には連れて行きなさい」

「使い魔ですって!？」

幹生の言葉を聞いた途端、ほとりの目が輝いた。

「つ、つまりあたしにも遂にマスコットが付くんですね!」

「マスコットじゃなくて使い魔。お目付け役の監査役。アンダスタ  
ン?」

「うふふ、やっぱり魔法少女にはマスコットがないとねー」

全く話を聞いていない。やれやれ、と溜息を吐く幹生。

ほとりは二年前に特処二課に入ってきた時からこんな感じだ。  
能力的には一課のトップを張れる程だが、性格的に難がある。二  
課に流れてきたのはこれが原因だ。

もつとも、幹生は性格がこんななのは仕方ないと考えている。

立場的には公務員とはいえ、ほとりはまだまだ十三歳。本来ならば義務教育すら終えてない年齢だ。精神年齢が幼いのはどうしようもない。

……かといって特別扱いするつもりはない。指導しなければ叱咤を受けるのは幹生である。

「で、あたしのマスコットはどこですか!？」

撃ち抜け！ トリ八ピ魔法少女ほとりちゃん！

「マスコットじゃなくて使い魔。……まあいい、入って」

訂正を諦めると、幹生はドアに向かって呼びかける。

「お。やっと出番かい」

が、その声は開け放たれた窓から。激しい羽音を立てて降り立ったのは

「……カラス  
鳥？」

「鳥だな」

どこか魂の抜けたほとりの声に、幹生が答える。  
幹生自身、何が来るのかは聞いてなかったので、これが使い魔との初対面だ。

「フツ、只の鳥じゃねえぜ。オレっちは誇り高き、ヤタガラス八咫鳥の末裔さ」

偉そうに説明する鳥に幹生は視線を向ける。

成程、サイズこそ普通の鳥だが、確かに足が三本。八咫鳥の末裔  
というのは間違いではなさそうだ。

霊鳥系統の使い魔は総じて知能が高い。監査役としては打って付  
けだろう。

まあ問題があるとするれば……。

幹生は横目でこの使い魔の主人となるであろう少女を見る。

「……………」

「よっ、嬢ちゃんがオレっちの主人になるんだな。これからよっしく！」

顔をうつむかせ小刻みに震えるほとりに、烏は無遠慮に声を掛ける。が、次の瞬間

「ああああああっ！ もうっ！ どういうことですか、幹生さん！」

「ぐべろっ！」

手の中に黒き魔杖　ベルゼルアルドを具現させ、烏を殴り飛ばすほとり。しかし言葉の矛先は上司である幹生に向けられた。数時間前とは別人のように凄まじい覇気に満ち溢れている。

「どういうことって、何が？」

「コレですよ、コレ！ 何ですか、烏って！ 魔法少女のマスコットに烏って、どんだけ不吉なのを連れてるんですか！」

「マスコットじゃなくて使い魔なんだからしょうがないだろ……。それに八咫烏は別に不吉じゃないぞ」

八咫烏は神武天皇の東征を先導した大烏。特に不吉の象徴になる物ではない。

「八咫烏だからいい訳じゃないんです！ パツと見どうなのかが重要なんです！ どっちにしる魔法少女のマスコットには相応しくないです！」

撃ち抜け！ トリ八咫魔法少女ほとりちゃん！

撃ち抜け！ トリハピ魔法少女ほとりちゃん！

「まあまあ嬢ちゃん、オレっちも捨てたもんじゃないぜ。一度体験したらヤミツキになるって」

「ええいつ、黙ってて！」

「じぶらっ！」

なだめようと近づいた鳥が、再びほとりに殴り飛ばされる。

ほとりとしては鳥などが近くにいては、イメージの悪化は免れない。

魔法の杖で鳥を叩いている時点で、魔法少女としては致命的なイメージダウンになることには気付いていない。

「とにかく！ 納得いきません！」

「そう言われてもな……」

ぶつちやけた話、幹生はほとりの使い魔が鳥だろうが、イグアナだろうが、スカイフィッシュであろうがどうでもいい。

それに鳥がやってきたのは上司命令だ。幹生に訴えられてもどうにもできない。

幹生がその旨を投げやり気味に説明すると、ほとりは憤然として声を上げる。

「じゃ、幹生さんが掛け合ってきて下さいよ！」

「水無瀬川が真面目に働いてくれたら、何の問題もなかったと思うのだが」

撃ち抜け！ トリハピ魔法少女ほとりちゃん！

ほとりの話を流しつつ、幹生は現実問題を提示する。

そう。烏が来た直接の原因は、ほとりが不祥事を頻繁に起こすからだ。

円滑に事を運んでいれば、そもそも監査役など来る訳がない。

「なら、あたしがこれから真面目にやっ行って行けば？」

「そうだな……十件くらい仕事を穩便に片付けて、監査役が問題なしと言えは何かかなると思っが」

そのくらいやれば、幹生自身が掛け合ってきてもいいと判断する。

「ホントですね？」

「嘘を言ってるつもりはない」

眼光激しくにじり寄るほとり。その迫力にさしもの幹生も視線を逸らす。

「……分かりました。不肖水無瀬川ほとり、本日より心を入れ替えて仕事します！」

ほとりはそう言うと、何故かビシリと敬礼をする。

「それではこれより訓練に行ってきます！」

いつもより遥かに気合が入った感じで部屋の外に出て行く。その左手は二度の殴打で気を失った烏の首を引っつかんでいた。

撃ち抜け！ トリハピ魔法少女ほとりちゃん！

その後ろ姿を幹生はやれやれといった感じで見送る。

「……今更アイツに監査役付けて何になると言うかな、上の人は」  
廊下の方から「絶対に！ 穩便に終わらせるんだから  
！  
という叫びが聞こえてきた。

それほどまでに烏は嫌なのだろう。確かに魔法少女が連れるモノではないが。

しかしどんなに気合を入れて頑張っても、ほとりが十件も穩便に仕事を終わらせられるはずがない。幹生はそんな、確信に近い予感があった。

何しろ彼女は人呼んで

「 “トリハピ魔法少女” だからな……」

それから一週間。八件ほど穩便に仕事を片付けたほとりがいた。

「あと二件。あと二件であたしはこのクラスから解放される……！」

「おお、そうになったら嬢ちゃんともお別れか。寂しくなるぜ……！」

「あたしは清々するよ」

「手厳しいなあ、相棒。もつと悲しんでくれよ」

一週間も経てば得てして慣れる物であるが、ほとりはいつこうにカラスに慣れる事はなかった。

自身のマスコットキャラとしてはあまりにもアレな外見は元より、その喋り方も非常に気に食わなかったからである。

だから、反発の意味も込めて“カラス”と呼称している。

始めの内はカラスも自分の名前を呼ばせようとしていたが、三日くらいで諦めた。賢明な判断である。

「あたし、我慢だガマン。これもあと二件の辛抱……！」

そう言い聞かせて自重するほとり。ちなみに一週間前から同じようなことを言い続けている。

特処二課の仕事は主に、一般社会に害を与える魔獣　その中でも特に“エッグ”の駆逐である。

一般社会に“魔法”という物は公表されていない。

というのは“魔法使い”の数が少ないのもそうだが、科学文明が進んだことにより、物理法則に則らない“魔法”の存在が世俗には邪魔だったからだ。

しかし、それでも世界は“魔法使い”を必要としている。

理由は単純明快。“魔法使い”がいなくても“魔法”は存在してしまうから。

“魔法”は万能にして単純な法則。誰しもが持つ願望を現実に戻させる力。

『もしも〜だったら』という可能性を見出し、それを現実として

出力する。それが“魔法”。

そもそも“魔法使い”の数が少ないというのは、可能性を現実として出力する為の力 所謂“魔力”を実用可能なレベルで保持している人間が少ないということだ。

逆を言えば、“魔法”を使用する為の第一段階である、可能性を見出すことは誰にでもできる。

“エッグ”はそうした、この世界に生きる誰かが、いつか夢見た可能性。

見出されたが放置された可能性は人間の無意識下に堆積し、カチを歪ませ、他の可能性を喰らい始める。

肥大化した可能性は無意識下より浮上し、人が夜見る夢にまで影響を出し始める。

夢の世界は一つであり、全ての人間の夢は繋がっている。複数の人間が悪夢を見ることを対価に、想いより“魔力”を吸い上げ、“産まれなかつた可能性”は世界に現出する。

“魔法”から生み出されたモノに対抗できるのは“魔法”だけ。物理法則を凌駕する存在に、現代兵器は限りなく脆弱。無効ではないが、焼け石に水。

だからこそ“魔法使い”は必要とされ、特処二課は存在する。

「うー、仕事仕事。早く次の仕事こーい！」

「嬢ちゃん、そりゃ不謹慎だぜ。仕事がないほうが平和なんだからな」

「いいのっ！ 穀潰しのカラス連れてる方が、よっぽど平和を乱す

撃ち抜け！ トリハピ魔法少女ほとりちゃん！

んだから」

ほとりにとってカラスを連れているのは、世界の天敵が街中を闊歩しているより危険なことなのだ。

もっともカラスの方はこの一週間でほとりの性格を理解したのか、そんな暴言にも動じない。

「てか嬢ちゃん、今の時間分かってるか？」

「え？ 二十一時だけど」

「“エッグ”は基本的に人間が寝静まった深夜にしか出ねーぞ？  
今からそんなテンションで大丈夫か？」

“エッグ”が世界に現出するには多くの人間の夢が必要不可欠。  
その為、現れる時間という物は大体決まってくる。

ほとりもそのような事は言われるまでもなく理解している。しかし、

「いざ“エッグ”と戦う時になってハイテンションじゃダメでしょ。  
ローテンションじゃなきゃ、あたし絶対何かやらかすだろうし」

自分の性格をキチンと把握しているほとりは、どんな状態だと不祥事を起こしやすいかも分かっていた。

自分が何かを起こすときは、大抵の場合元気があり余ったハイテンション状態だ。

そこで、わざとローテンションで仕事をする事によって余計な事が起こらないようにするという、ある意味逆転の発想を取ってみた。

今の所この作戦は成功で、この一週間の仕事で不祥事は起こして

いなかった。

そういった点において、ほとりは年齢にそぐわぬ思考を持っているが幾つか見落としがあった。

それは常人ならば気付いて当たり前なのだが、良くも悪くも常人でないほとりにとっては全くの盲点だった。

一つは、疲労は蓄積するということ。もう一つは、彼女がストレスを溜めているということ。

この二つの見落としが、後に彼女にとってこの上ない不幸を呼ぶことを、今のほとりは知らなかった。

数時間後。

星明り一つない濃密な夜闇を駆ける影。ほとりとカラスだ。

魔法庁より“エッグ”感知の報を受け、現在現場に移動している所である。

「しつごと、しつごと」

言葉だけ聞いていると、まるでワーカホリックのように思える。

おそらく今のほとりは世界で一番仕事を楽しみにしている人間だろう。

撃ち抜け！ トリハピ魔法少女ほとりちゃん！

撃ち抜け！ トリハピ魔法少女ほとりちゃん！

しかし言葉に覇気はない。おまけに顔色はすこぶる悪い。今にもぶっ倒れそうだが、そこは気力でカバーしていた。

「ちーと妙だな。ここんどこ、やけに“エッグ”の数が多いような気がするぜ？」

ほとりの傍らを飛ぶカラスは冷静に思ったことを口にする。

“エッグ”の現出頻度は精々三日に一度、あるかないか。

それなのに、この一週間は毎日のように“エッグ”が現れていた。これは異常事態ではないか、という意味の進言だったのだが……

「ふん、そんなのどうでもいいよ。あたしは仕事を片付けるだけ」

ダンッ、つと地面を蹴り、さらに加速する。

ほとりは魔法少女を名乗っているが、本人に飛行魔法の適性がないので空を飛べない。

“飛ぶ”ではなく“跳ぶ”。アグレッシブな新感覚魔法少女なのだ、と本人は誤魔化している。

今回“エッグ”が現れたのは、郊外の森。

“エッグ”は現出必要条件こそ人間の手を借りるが、現出位置は完全にランダムだ。

街のど真ん中に現れることもあれば、全く人気のない廃屋に住み着くこともある。

森の周辺に人の気配はない。それどころか、動物の気配すら皆無。動物は空気の変化に敏感であるから、“エッグ”が現れたことを感じ取って逃げ出したのだろう。

……それとも逃げ出す暇さえなく捕食されたか。

撃ち抜け！ トリハピ魔法少女ほとりちゃん！

ほとりはひとまず森の中心にたどり着く。

“エッグ”が自ら向かって来ない限り、“魔法使い”は何らかの方法で探さなくてはならない。

その際に最も使われるのが探知魔法。一定範囲内の任意物体を見つけて出す魔法である。

ほとりが覚えているのは基本的に戦闘用の魔法ばかりなので、こういった補助系魔法は著しく範囲と精度が落ちる。その為こうやって目的地のど真ん中で魔法を使用する必要がある。

「ベルゼルアルド、ナインス・フォーミュラ 第九魔法式、オープン 展開 『イージー・サーチ 分かれた探索者』」

右手に握られた漆黒の魔杖が、ガキンという音と共に魔法を放出する。

ほとりの周囲を舞う碧色の光の帯は、収縮した後、一拍をおいて拡散する。

「えーと、位置は……」

魔法が送ってきた情報を頭の中で整理する。

本来このような雑事は使い魔がやるのだが、ほとりの使い魔たるカラスは穀潰しである上に、彼女自身が仕事をさせようとも思わない。

魔法が伝えてくる“エッグ”の位置は

「は？ 真上……？」

そう言ってほとりが顔を上に向けると、

「HHHHHHHHHHHHHHHHHHHHHHH!!!」

雄叫びを上げて異形が襲い掛かってくるのは同時だった。

「くっ！」

前に転がってその巨体を回避する。先程までほとりがいた場所を異形の巨口が貪りつくす。

今回の“エッグ”は全長三メートル。イソギンチャクを横にして、底面となる部分に人間の足を付けられるだけ付けたような形をしている。側面からは毛むくじらの人の手が、助けを求めるようにもがいていた。

“魔法使い”は確かに“エッグ”の天敵ではあるが、“魔法使い”も人間 即ち“エッグ”のエサである。

故に時折こうした好戦的な“エッグ”も存在する。場合によっては返り討ちにあう“魔法使い”も少なからずいた。

「嬢ちゃん、くれぐれも火属性だけは使うなよ！」

同じく“エッグ”の攻撃を避けたカラスが叫ぶ。

このような森の中で火属性魔法を使えば、至極簡単に焼け野原の出来上がりだ。

「そのくらい分かってるっ！ セランス・フォーミュラ 第七魔法式、オープン 展開！」

苛立ち紛れの返答と共に魔法を展開。ほとりの周囲に白色の光が浮かぶ。その数、二十三。

トリハピ魔法少女ほとりちゃん！ 撃ち抜け！

「聖者の裁き、賢者の裁き。西より来る間に魔を捕らえよ 愚<sup>リ</sup>  
者捕<sup>キ</sup>らえし縛鎖<sup>ル</sup>」！」

計二十三本の、光を放つ鎖が射出される。

鎖は目にも留まらぬ速さで“エッグ”に接近し、その巨体を地面に縛り付ける。

「HYOOOOOOOOOOOOOOOO!?!?」

“エッグ”は身動きを取ろうと必死で暴れるが、光の鎖はビクともしない。それどころか逆にその体を締め付ける。

「これで終わりよっ、<sup>サード・フォーミュラ</sup>第三魔法式、<sup>オープン</sup>展開！」

“エッグ”の動きを完全に封じたのを見て、ほとりは即座に次の魔法を組み立てる。

ガキンという音と共に放出される、金色に輝く光の帯。

「集え、破魔の雷。直天より降りて裁きを下せ <sup>ヴァーチカル・ストライク</sup>断絶の雷神斧<sup>」</sup>  
！」

「HYO……HYYYYYOOOOOOOOO !!!」

黄金の輝きが振り下ろされ、“エッグ”の巨体を灰に還す。完全に倒したことを確認すると、ほとりは肩から力を抜いた。

「よし、終わった終わった。これであと一件で……」

カラスともオサラバだ、とほとりが続けようとしたその時

撃ち抜け！ トリ八ピ魔法少女ほとりちゃん！

「危ねえ、嬢ちゃん！」

「わわっ！？」

突然カラスに背中から体当たりされる。

サイズは普通のカラスと変わらないとはいえ、彼も八咫鳥の端くれ。ほとりはその衝撃で十メートルほど吹き飛ばされた。

「いつ、たたた……痛いじゃない！ 何するの！」

「オレっちを怒ってる場合じゃねえ！ 周りをよく見ろ、周りを！」

「周り？」

いつにない剣幕で怒鳴ってくるカラスに、ほとりも素直に辺りを見回す。

何も無い、いや

シンとした夜の森。動物の気配のない森。まるで死んでいるかのような森。

なのにカサカサ、音が聞こえる。だけどヒソヒソ、声が聞こえる。何かヒタヒタ、歩いてきている。

辺りを取り囲むかのような多数の“エッグ”。さらに先程までほとりがいた場所には

「な、何アレ……？」

ほとりは特処二課で働いて二年になるが、こんなモノは見たこと

がなかった。

ぶちゅりぶちゅりと脈動する赤黒い肉の塊。大きさは五メートルほど。そこから中に空るな穴と目のない人間の顔があり、穴から伸びる多数の触手には無数の眼球が付いている。

その眼球の瞳が、ほとりとカラスをじっと見つめていた。

しかし、ほとりが驚いたのはそんな所ではなく、その多くの穴から黒い瘴気が断続的に噴出し、それが“エッグ”を作り出しているという点だ。

「ありゃあ“<sup>ホール</sup>夢幻孔”だ」

ほとりの傍らに降り立ったカラスが説明する。

「ホール？」

「ああ。“エッグ”が人の夢から魔力を集めて出てくるのは知ってるな？ で、現実世界で様々なモンを喰い散らかすワケだが、要するにそれは魔力を喰ってるんだよな」

カラスは視線を“<sup>ホール</sup>夢幻孔”から微塵も動かさずに説明を続ける。

「そうやって一定以上の魔力を集めると“エッグ”は“<sup>ホール</sup>夢幻孔”になる。こうなると通常の捕食活動の他に、空気からも魔力を取り込んで下っ端“エッグ”を生産し始める」

「ってことは……」

「“エッグ”を倒してもムダ。何とかするならデカブツを叩くしか

撃ち抜け！ トリ八ピ魔法少女ほとりちゃん！

撃ち抜け！ トリハピ魔法少女ほとりちゃん！

ねえ」

ちなみに“ホール夢幻孔”は“エッグ”より数段つえーぞ、とカラスが付け加えると、ほとりはガクリとうな垂れた。

「し、仕方ない。もう一度やるしかないのね」

「おいおい、止めとけ嬢ちゃん。オレっちの知る限り“ホール夢幻孔”を何とかするには十人くらいで合成魔法を使わなきゃダメだ。嬢ちゃんが強いのはこの一週間で見ちゃいるが、相手が悪い。逃げるぜ」

「逃げれるかつ！ 仕事終えなきゃ、アンタと離れられないでしょ！」

「あつ！ 嬢ちゃん！？」

カラスの静止を無視して、ほとりが駆ける。

「先手、必勝つ　！」

地面を蹴り、“ホール夢幻孔”の真上に高速で移動。

「ヴァーチカル・ストライク断絶の雷神斧」ツ！」

再び、黄金の輝きが駆け抜ける。“エッグ”を一撃で屠る雷撃が一直線に振り抜かれ、一拍をおいて爆音を響かせる。

しかし

「がっ　！？」

撃ち抜け！ トリハピ魔法少女ほとりちゃん！

衝撃を受けて吹き飛ばされるほとり。

“夢幻孔<sup>ホール</sup>”が雷撃など意に介さずに触手で打ち払ったのだ。その一撃で受身も取れずに、元いた地面に叩きつけられた。

「嬢ちゃん！ 大丈夫か！？」

「ぐ……だ、大丈夫だいじょうぶ」

口では大丈夫と言っているが、大丈夫そうには見えない。

この森に来た時点で疲労でぶっ倒れそうになっていたのだ。気力で立っているにも限度があるだろう。

「GYAAAAA OOOOOOOOOOOOOOOOOOO H

！……」

今まで沈黙していた“夢幻孔<sup>ホール</sup>”が雄叫びを上げる。

脈動が速くなり、眼球の付いた触手が激しくのたうつ。

次の瞬間、眼球が縦に割れ、小さな、しかし鋭い牙を持つ口が、ほとりに向かって凄まじい勢いで飛んできた。

「くつ 『無我の盾<sup>ザ・シールド</sup>下』！」

数多の口に喰らいつかれる寸前に、ほとりが防壁を展開する。

不可視の障壁の前に口は悉くその進路を阻まれるが、それでも止むことなく突撃を続ける。

「うつつ、埒が明かない……」

撃ち抜け！ トリハピ魔法少女ほとりちゃん！

防壁が破られることは今の所なさそうだが、これではこちらも移動できない。このままではジリ貧だ。

そんな中、カラスが重い口調で問い掛ける。

「……嬢ちゃん。この攻撃が止んだら逃げ切れるか？」

「は？ まあ、逃げようと思えば可能だけど？」

イライラが募る中、一応カラスの問いに答えていくほとり。

「……よっし、オレっちが囿になる！ 嬢ちゃんはその隙に逃げろ！」

「え？ ちょっと……」

「これでもオレっちは嬢ちゃんの使い魔だぜ！ 嬢ちゃんを守らなきゃなんねえ！」

「いや、だから……」

「行くぜっ！」

ほとりの声を最後まで聞かずにカラスが飛び出す。

“ホール夢幻孔”の注意は高速で自らに近づいてくるカラスに向けられ、射出されていた口は全てカラスに向かう。

「カラス！」

撃ち抜け！ トリハピ魔法少女ほとりちゃん！

ほとりが声を荒げるが、カラスは止まらずに“夢幻孔<sup>ホール</sup>”に突進する。

「おおおおおおっ！！！」

だが、“夢幻孔<sup>ホール</sup>”の口はカラスの飛翔より速い。

「があっ！？ クソっ！」

途中で翼に喰らいつかれ失速。それでも飛び続けようとするが……

「嬢ちゃんスマン……十秒も稼げんかった……」

奮戦空しく、雑草が無造作に生える地面に墜落。夜闇の中、そのまま動かなくなった。

ほとりはその様を見ているだけだった。

「カラス……」

その声に答える者はいない。

「生きてるの……？」

その声に答える者はいない。

「……死んだの？」

その声に答える者はいない。

撃ち抜け！ トリハピ魔法少女ほとりちゃん！

「……………」

“夢幻孔”<sup>ホール</sup>がカラスに向けていた注意をほとりに戻す。  
ほとりは、逃げなかった。

「……………」

ただそこに、立っていた。

星は分厚い雲の向こう、月はそもそも輝いていない、闇夜。  
異形共のざわめきは、暗き森林に静かに響く。  
その歪なる静寂を破るかのように、異形の母は咆哮する。

「GYOOOAAAAAAAAAH !!!!!」

異形の母が持つ無数の眼球が縦に割れ、多くの口がその姿を覗かせる。

それらが狙うのはこの場に存在せし、唯一<sup>エサ</sup>の人間。

周囲を囲むは強靱なる異形の群れ。前に立ち塞がるは絶大なる異形の母。

相對するは自分一人。頼れる仲間はどこにもいない。  
少女ならば、否、大の男であっても絶望するしかない状況で

撃ち抜け！ トリハピ魔法少女ひとりちゃん！

「……………ふっ」

彼女は、唇の端を吊り上げた。

「ふふふっ」

笑う。嗤う。晒う。

「あははははははっ  
「！」

全部まとめて 笑い飛ばす。

キレた？ 否。

狂った？ 否。

「ははっ、  
“夢幻孔”<sup>ホール</sup>とやら、アンタはやっちゃんいけないことを三つした」

ただ単に、異形共の不運を嘲笑っているだけ。

左手の指を三本立て、笑顔で、言う。

身に纏う気配で異形の母を黙らせる。

先程までの疲労全開の人間だったとは思えない、まるで別人の気配。

「一つ目、あたしの機嫌が悪い時に攻撃したこと」

ならばどこまでも安らかに。

「二つ目、<sup>カラス</sup>お目付け役を殺ったこと」

撃ち抜け！ トリハピ魔法少女ほとりちゃん！

ならばどこまでも容赦なく。

「三つ目、あたしの前に現れたこと」

ならばどこまでも熾烈に苛烈に、愚劣にして愚鈍なる愚図を  
消去する。

左手は順繰りに指を折り曲げ、右手はクルクルと杖を回す。その  
動作に意味はない。しかしそれは予備動作。

「消える、ブサイク」

ガコン。金属の部品が動く重い音。

ガシャン。金属の部品が接続する音。

音を鳴らすは彼女の杖。漆黒の魔杖、ベルゼルアルド。

「ベルゼルアルド、セカンドフォーム第二形態……”ン：ルヴァルノ・ベルトウイッチ虹色の乱の魔女”」

それは 銃。

全長一メートル二十センチ。巨大すぎる六連装リボルバー。

色が黒いこと以外に面影など全くない。形状どころか質量、体積  
すら違うが、それは確かに彼女の魔杖。

もはや大砲のようなソレを、両腕で抱え込んで彼女は言う。

「あたしの名前は水無瀬川 ほとり。人呼んで、トリハピ魔法少女  
ほとりちゃん」

“トリハピ魔法少女” それは“トリガーハッピーな魔法少女  
”と揶揄される、彼女の蔑称。

撃ち抜け！ トリハピ魔法少女ほとりちゃん！

しかし彼女はあえてそれを名乗る。その名は破壊と殺戮の象徴だから。

左手が、引き金に掛かる。

狙うものは自分以外の全て。コレもアレもソレも皆、彼女が滅ぼすべき世界の天敵。

「悪いけど全力で行かせてもらうよ。周りの“エッグ”も含めて、ね」

宣言する 敵を打ち倒す、と。

宣言する 全部薙ぎ払う、と。

宣言する 全員撃ち殺す、と。

少女の銃が、咆哮した。

とりがーはっぴー【trigger-happy】

意味：やたらピストルを撃ちたがる。軽拳妄動。けんかつぱやい。ひどく好戦的な。

「あはははははっ、弱い弱い弱いつー！」

脅威を本能的に感じ取ったのか、周りを囲むだけだった“エッグ”が攻撃を加え始めた。

しかし、彼らが好戦的なタチだったのが運の尽き。

その口が、牙が、手が、爪が届く前に、ほとりの銃撃は彼らの体



魔弾の連射が飛び掛る口を撃ち落とす。次から次へと飛んでくるが問題ない。

連射、連射、連射に次ぐ連射。

一が駄目なら十を撃つ。十が駄目なら万を撃ってみせる。口を全部撃ち落とせば、次は本体も撃ちまくる。

が、どうも“夢幻孔”<sup>ホール</sup>は自己再生能力を持っているようだ。いくら撃つても傷がすぐ治る。

それは周りの“エッグ”も同じ。

“夢幻孔”<sup>ホール</sup>を倒さないことには数を減らすことは一向にできない。

「ああもつつ、弱いだけで数が多いのはウザイだけだったの！」

思い出せ。カラスは何と言っていた？

『オレっちの知る限り“夢幻孔”<sup>ホール</sup>を何とかするには十人くらいで合成魔法を使わなきゃダメだ』

十人くらいで合成魔法。それならば、この“夢幻孔”<sup>ホール</sup>を倒すことができる。

「ベルゼルアルド！ セカンド・ハイエスト・マジカルバセットアップ 第二特級魔法弾、装填！」

ガキンガキンと音を立て、ほとりの抱えるリボルバーの弾倉が回転する。

膨大な魔力が弾丸に込められ、一つの魔法を形作る。

それが撃ち出されるのは黒の銃口。それが狙うのは赤黒の肉の塊

“夢幻孔<sup>ホール</sup>”。

カラスは何と言っていた？

『嬢ちゃんが強いのはこの一週間で見ちゃいるが、相手が悪い』

その言葉はまるで見当違い。

カラスが強いと評した“この一週間の嬢ちゃん”は“本来の水無瀬川 ほとり”の強さとは程遠い。

“トリハピ魔法少女ほとりちゃん”こそが彼女の真の実力。本気で掛かれば

「スター、ステラ、アステル！ 星よ、集え！ 煌け！ 光輝け！  
おちかた遠方より来たれり汝は聖人、故に御身に諸々の罪穢れはなく、故に其の力は邪鬼悪鬼を焼き滅ぼす ！」

十人分の魔力を込めた魔法を使うことなど、訳もない。

カラスと離れたい一心で場所によって属性を使い分け、魔法出力をセーブしていたのだ。

そのカラスがいない今、遠慮も配慮もありはしない。

発動前から辺りに満ち溢れる白き輝き。周囲を舞うのは光の粒子。力の余波で風が吹き、ほとりの髪が夜闇になびく。

それは魔法。それは絶対。それは夢。それは力。それは幻。それは星。

撃ち抜け！ トリハピ魔法少女ほとりちゃん！



頭の中にあるのは“殲滅”の文字。  
言いながらも再び、黒き巨銃の引き金を引く。

「もちろん、残ったヤツもね！」

銀の魔弾が駆け抜ける。慈悲も手加減も周りへの配慮も一切なく、それは残った“エッグ”たちを滅ぼしていった。

後日。

「水無瀬川。お前は一体な・ん・と言われたら理解する……!!」

「うう……」

暴れに暴れまくったトリハピ魔法少女は、灰色のデスクが六つ並ぶオフィスで説教されていた。

「結果もない地上で拠点殲滅用の放出系、それも特級魔法……さあ、どうなるか言ってみなさい」

撃ち抜け！ トリハピ魔法少女ひとりちゃん！

撃ち抜け！ トリハピ魔法少女ほとりちゃん！

「えと、直線上の建物やら何やらを十キロ先まで薙ぎ倒した後、衝撃波で周辺二キロ半の物体を破壊します……」

理由は昨夜の魔法行使について。説教しているのはほとりの直接の上司、綾倉 幹生だ。

「うん、よくわかったな。合格だ」

「やったー。あはははは」

「はははははは」

「……………」

「ハハハハハハハハハハハハハハハハ」

「ごめんなさい、もう止めてください」

乾いた声で笑い続ける幹生が怖くなり、反射的に謝るほとり。

当然の如く今回は大きな被害が出て、下手をしたので大惨事になっているのだ。幹生が壊れるのは当然である。

魔法庁特殊災害処理二課。通称、特処二課。

決して表沙汰にはならないが、ほとりは歴とした日本国の公務員だ。

“魔法使い”は数が少ない……だからこそ、こんな惨事を繰り広げても懲戒免職にはならない。

人死に出していないのも、大きな要因ではあるが。

「えと、これでもあたし頑張ったんですよ？ でもアイツ、とんで

撃ち抜け！ トリハピ魔法少女ほとりちゃん！

もなく硬くってやりにくいったら、もう

「千枚だ」

「え？」

「今回の件で俺が書いた始末書は千枚だ」

「え、えーと、それは……」

困惑するほとりに、幹生は乾いた笑い声を交えながら言った。

「お前も書くんだよ！」

「は、はいですっ！」

慌ててデスクに向かうほとりを無視して、幹生は睡眠を開始する。ほとりの直属の上司ということは、彼女の起こした不始末を上記報告する義務がある。

言い換えれば、報告して説教される義務がある。

「はあー、なんで俺が……」

綾倉 幹生、二十二歳。今日も苦勞に耐えられない一日のようだ。

撃ち抜け！ トリハピ魔法少女ほとりちゃん！

「 という訳で、水無瀬川には今後ともお目付け役が付きます」  
「 はい？」

ほとりが始末書を四百枚ほど仕上げると、何やら沈んだ顔で幹生が戻ってきた。

ほとりがデスクに向かって六時間、その間に上の人に怒られたのだろう。

「 てかどうという訳……いえ、何でもありません。分かりました」

いきなり『 という訳で』と始められたのでは、何がなんだか分からない。が、ほとりが自身のやっていることを考えれば、分からない方がおかしい。

というより、幹生の『 分らないでか……！』という顔が凄まじく怖かったので、ほとりは疑問を言いきることなどできなかつた。

「 えっと、今度は何ですか？ イグアナ？ スカイフィッシュ？」

カラスは居なくなってしまったので、次に思い付くのはそんな感じだった。

どっちにしろ、お目付け役に来るのはほとりのイメージに合わないモノばかりだが……。

「 おお、よく分かったな」

「 え、ホントに？」

冗談半分の言葉をあっさり肯定され、目を剥くほとり。

そんなほとりを見て幹生は訂正を入れる。

「いや、俺が先週考えたことを、そっくりそのまま言い出したから」

「先週カラスが来た時、そんなこと考えてたんですか……」

幹生は結構優秀な人材らしいが、ほとりは彼のどこら辺が優秀なのか知らない。

いや、始末書を書き上げる能力は人一倍あるだろうが。

「で、結局何ですか？」

「ん？ ああ、入って」

幹生はどこかめんどくさそうに、窓に向かって呼びかける。

「よっ、嬢ちゃん。一日振り」

開け放たれた窓に、羽音激しく降り立ったのは

「……………」

「カラスだよ」

どこか魂の抜けたようなほとりに、幹生が声を掛ける。

幹生自身は何が来るのか知っていたので、別段驚きも何もない。

「フツ。やっぱり嬢ちゃん、オレっちが死んだと思ってただろ？」

何故か得意そうな口調のカラス。

撃ち抜け！ トリハピ魔法少女ほとりちゃん！

撃ち抜け！ トリ八ピ魔法少女ほとりちゃん！

三本足。サイズは普通の鳥と変わらない。何故か体中包帯だらけ。

「……幹生さん。どうしてコイツは生きてるんでしょう？」

カラスに訊けばいいのに、わざわざ幹生に尋ねるほとり。

カラスがまともな説明をするか不安だったので、幹生が簡潔に答えることにした。

「使い魔は墜落したくらいで死なない。“エッグ”にしる“ホー夢幻孔”にしる、まず魔力の高いモノから狙っていく」

要するにカラスが死んだと思ったのは、単にほとりの早とちりである。

「ああ。あと、水無瀬川の魔法に巻き込まれなかったには偶然」

「ワザワザ言わなくてもいいですよ……」

もし巻き込まれてたらカラスなど跡形も残らないだろう。

「え……ってかカラスが生きているということは……」

「そりゃあ勿論」

「ヨロシクな、相棒！」

ピシッ、っと片方の羽を上げるカラス。妙にやる気満々だ。対照的にほとりの顔が引きつった。

「し 仕事！ 早く仕事を下さい！ 今度こそ、今度こそ穩便に

済ませますから！」

「今度は十件じゃ無理だぞ」

幹生が冷静に状況を宣告する。

今度は実害が出ているから、命令撤回は前よりも遥かに難しい。

「十件でも百件でも大丈夫です！ このカラスから逃れる為なら！」

「ニシシ……そんなこと言ってホントは嬉しいんだろ？」

「ええいつ、黙ってて！」

「ぐぼあっ！」

ほとりに殴り飛ばされるカラス。

先週も同じような光景があった。多分、これからは毎日のように展開されるのだろう。

「絶対に！ 穩便に終わらせるんだから

「！」

オフィスの中に少女の声が響き渡る。

トリハピ魔法少女は今日も元気一杯だ。

撃ち抜け！ トリハピ魔法少女ほとりちゃん！

(後書き)

魔法少女が書きたかった……んだけどなあ。

何故か魔砲少女になってしまったというオチ。

当初のハートフル魔法少女を書く予定は一体どこに消えたのか。

改めて私は「プロットなんかクソくらえ！」というダメダメスタンズだということを確認できる。

そんな経緯で生み出された、ある意味偶然の産物とも言えるこの物語を読んでくれた人が少しでも楽しんでくれたら、私は大層嬉しいです。

楽しめなかった人でも暇潰しになってくれれば、幸いです。

それでは、ここまで読んでくださってありがとうございます。

撃ち抜け！ トリハピ魔法少女ひとりちゃん！

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9021d/>

---

撃ち抜け！ トリハピ魔法少女ひとりちゃん！

2009年3月24日12時03分発行